

フランク・ロイド・ライト初期

□フランク・ロイド・ライト生
1867
ウィスコンシン州に牧師の父ウリアム・ライトと母アンナの間の第1子として生まれた。ウィスコンシン大学マディソン校土木科を中途退学した後、シカゴへ移り住んだ。



□Joseph Lyman Silsbee
1848~1913

19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍した。フランク・ロイド・ライトらフレーリー派 (Prairie School) と称された建築家たちに大きな影響を与えたことで知られている。

□独立
1893
アドラー＝サリヴァン事務所に勤め1893年、事務所での設計業務とは別にアルバイトの住宅設計を行っていたことがサリヴァンの知るところとなり、その件を咎められたライトはアドラー＝サリヴァン事務所を辞し、独立して事務所を構えた。



□Louis Henry (Henri) Sullivan
1856~1924

アメリカの建築家。シカゴ派の代表的な建築家一人でその理論的・文化的支柱であった。フランク・ロイド・ライト、ヘンリー・ホブソン・リチャードソンとともにアメリカ建築の三大巨匠とされる。

影響

フレーベルの恩物

球や立方体などの数学的な原理の学習や生活の周囲にあるものをそれ表現したりして遊ぶもので、教育玩具の始まりをなすものといってよい。国内のいくつかの幼稚園では、これを幼児教育に積極的に活用しているところがある。フランク・ロイド・ライトは、自分の建築がこの恩物の影響を受けたものだと語っている。



□ウィンスロー邸
1893

フランク・ロイド・ライトが建築事務所を開いて最初の仕事として建てた住宅。バランスのとれた中央集中的な正面ファサードは古典主義の影響を示唆しているが、ローマレンガ、キャストコンクリート、テラコッタといったシンプルで自然な材料を採用し、当時の住宅とは対照的な方法でこれらの材料を構成した。レンガはキャストコンクリートの雨押さえから立ち上っている。2階はゴールドのレンガとは対照的に、濃い茶色のテラコッタで抑えられた表現になっている。屋根は庇を大きく出し、ゆるやかな勾配で宙に浮いたような表現となっており、ヴィクトリア後期の急勾配の小塔とは対象をなしている。当時珍しい垂直なデザインと材料に忠実な処理が、この住宅を紛れも無く近代化している。

第一黄金期

□プレーリースタイル（草原方式）
1893~1910
独立した1893年から1910年までの17年間に計画案も含め200件近く建築の設計を行い、プレーリースタイル（草原様式 Prairie Style）の作品で知られるようになり、その件を咎められたライトはアドラー＝サリヴァン事務所を辞し、独立して事務所を構えた。

- ・水平の軸を持ち地面に張り付いたような外観
- ・家の中心に暖炉を配置しコアとする
- ・外壁は軸に対して開き内部と外部をつなげる



□日光東照宮
ライトのユニティ・テンプルに影響を与えた建築と言われている。平面図の構成が酷似している。

影響?



□ユニティ・テンプル
1905

主の構造体を鉄筋コンクリートによって作られた型枠を使った最初の建物である。ユニティ・テンプル設計に当たってライトは日本の建築物を大いに参考にしたといわれ、現在ではこのユニティ・テンプルと日光東照宮の構造と本殿の平面図との相似が指摘されており、それについてのドキュメンタリー映画なども先日シカゴでは公開されていた。しかしながら本人自身は、最後まで日本建築からの影響については固く首を縛る振りらず、あくまで独自のデザイン理念によるものだという意思表示を示し続けたとい。



□ロビー邸
1908~9

緩やかな勾配屋根、極端に突き出た軒先、横目地の強調された煉瓦の外壁、縦長の連續窓さえが水平線を強調する。ロビー邸は、実に第一黄金時代のライトが目標とした草原住宅の理想が、集約的に顕現した作品。中西部の草原地帯にあって、高さという高さは、すべて否定されなければならない、としたライトのモットーが、最もよく理解出来る住宅である。大地を這うように、一直線に伸びたこの住宅は草原と呼ぶに相応しい。

室内は、中央にコアを持つ、極めて単純な部屋割りになっていて、床や折上天井のように段差の付いた天井、それに窓ガラス一面に、ライトの得意の幾何学的な模様が配されている。

不幸・逆行

□不幸・逆境の時代
1910~1930
愛人であったチェニー夫人とヨーロッパへ駆け落ちを試みる。その後、帰国するも仕事の激減していた。タリアセンの使用人が突如発狂し建物に放火した上、チェニー夫人と2人の子供、及び弟子達の計7人を斧で殺されたのが服毒自殺した。現場に出ていたライトは難を逃れたが、これにより大きな精神的痛手を受け、さらには再びスキャンダルの渦中の人にとなった。そのような不幸に見舞われる中、帝国ホテルの仕事を依頼され来日する。

弟子



□遠藤 新
1889~1951

1917年、帝国ホテルの設計を引き受けたライトの建築設計事務所に勤務。



□平等院鳳凰堂

本殿を中心として左右に大きく広がる翼廊や池を中心としたプランはライトに大きな影響を与え、帝国ホテルの平面構成や正面からの外観に反映されたと思われる。

影響?



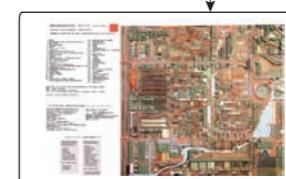
□帝国ホテル
1923

当時の総支配人だった林愛作は旧知のアメリカ人建築家、フランク・ロイド・ライトに新館の設計を依頼した。ライトは来日して、使用的石材から調度品に使う木材の選定に至るまで、徹底した管理体制でこれに臨んだ。鷺が翼を広げたような巨大なホテルは、実は小部分がいくつも繋ぎ合わされた連結構造になっており、これで建物全体に柔軟性を持たせるとともに、一部に倒壊があっても全体には累と及ぼさない仕組みになっていた。また大規模ホテルとしては世界で初めて全館にスチーム暖房を採用するなど、耐震防火に配慮した画期的な設計だった。

第二黄金期

□ユーズニアンハウス
1930~
プレーリースタイルを発展させた新たな設計方法。「ユーソニア」という言葉はアメリカ合衆国の頭文字を取って作られた言葉であり1925年のライトの執筆において初めて使われる。

- ・流动する空間
- ・室内と外部の連続
- ・材料の性質を活かして正直に用いる
- ・人間の尺度から決められたプロポーション
- ・統一されたデザイン
- ・快適な室内環境



□「プロードエーカーシティ」
1934~

・プロードエーカー・シティでは、すべての人に1人、1エーカー（約1235坪）の土地がそこを使うか住む場合、生への権利として与えられる。



□カウフマン邸（落水荘）
1935

溪流の上にダイナミックに跳ね出したリビングの屋根とそれと直行する大きなキャンチレバーのバルコニー。石を積んだ厚い壁は川床の岩がそのまま這い上がりリビングの暖炉と、厨房・寝室の外壁を構成し、スリット状に垂直に立ち上がる窓がさらにその垂直性を強調する。それに絡む薄い庇。全体が水平性と垂直性の絶妙なバランスを保っている。自然と一緒にした建物。まさにこの溪流と滝があってこそその建物である。玄関寄せの上に掛かるバーゴラと雁行する壁面。傾斜地の高低差をうまく利用した丘の頂にアーチルームとの連続性。広大なリビングに入る三方のガラス面からこの豊かな自然が飛び込んで来る。これに続く溪流を見下ろす事の出来る広いバルコニー、何とりビングから川面に下りる階段まで用意されている。

□有機的建築
1930~
有機的建築では、建築は有機体であるとし、自然と共生していくという考え方に基づいている。具体的には有機的建築とは、建築物はそれが置かれている環境全体と関連してデザインされ、統一感があるもので、さらに機能とデザインが一致していることとされている。

- 3つの自然の意味を持つ建築
- ・ありのままの自然
- ・形態としての自然
- ・ナチュラルという意味での自然



□ソロモン・R. グッゲンハイム美術館
1943~1959

グッゲンハイム美術館はライトの最も有名な建築である。グッゲンハイム美術館は「流動的」な構造を持つ。コンクリートが流線型にかたどられ、スチールで補強されている。美術館の壁はアーティストが絵画を描く時のペイントをのよに傾斜された壁に沿って絵画を照らしている。